

C O N T E N T S



後藤正文

(ASIAN KUNG-FU GENERATION)

僕たちの14年

253



奥浩哉

息をするように漫画を描く

233



山口裕子

(サンリオ)

「かわいい文化」再考

219



米澤穂

(グリーンハウス)

マネできない「ビックリマン」の魅力

181



石黒正数

同級生・友達・ライバル！

145



ヒグチユウコ

絵で食べていくこと

131



江口寿史

漫画とイラストレーションのあわいで

105



さだまさし

愛される歌であり続けるために

95



和田誠

好きと根気と、そして運

83



林 静一

少女絵に込める青春の匂い

71



わたせせいぞう

“太陽”を描き続ける

55



山本直樹

その曲線にときめけ！

33



宇野亞喜良

時代の空気をそっと捉える

5

中村佑介対談集「わたしのかたち」 6/20 刊行

宇野亞喜良

時代の空気をそつと捉える



二〇〇九年八月に刊行された中村佑介初の作品集『Blue』のヒットをきっかけにして、翌年、雑誌『ユリイカ』で中村佑介の総特集が組まれた。誌上で中村が対談を熱望をした一人目が、絵描きを目指していたという中村の母の若き頃のアイドルであり、今も現役のトップイラストレーターである宇野亞喜良さん。ためになるお話から掲載ギリギリの過激な話まで、語り尽くす。

「イラストレーター」であること

宇野 中村さんのお母さんは僕の絵を面白く見てくれていたというお話ですが、お母さんは画家志望ではなかった？

中村 画家志望でした。イラストレーター志望というか。最初は大阪のフーセンウサギという子ども服の会社に、一応イラストレーターというかデザイナーのような感じで入っていました。

宇野 ファッションイラストレーターみたいな感じで。

中村 そうですね。

宇野 たとえば竹久夢二とかの時代でも、夢二という人は画家としても認められているし普遍性もある人なんだけど、絵画というかファッションアートに対するコンプレックスがあって、京都で日展か帝展があった時に、すぐ横の画廊で自分の展覧会をやったこともあって、対抗意識というか、美術とは違う大衆美術みたいなジャンルにある種のコンプレックスがあったんですね。そういうのは、お母さんの時代になるともうないですよ。

中村 そうですね。もう完全にジャンル分けというか、こっちはこっちという感覚ですね。

中村佑介対談集「わたしのかたち」 2017.6.24刊行

宇野 僕の時代もないことはないんだけど、僕はグラフィックデザインが好きでそちらに行こうと思っていたから、画家とは違う、イラストレーターだというプライドがありましたね。コンプレックスはあまりありませんでした。あと、自分たちで「東京イラストレーターズクラブ」という団体を六〇年代に立ち上げたりしたので、僕は終生イラストレーターで通っています。「アーティスト」と書かれると、今までやってきた人生に対してなんかちょっと嫌というかね。それに「イラストレーション」だと思ったり、なんでもイラストレーションという気がしてきちゃって、たとえば舞台美術をやったり、条件があつてそれを見せる対象があつたりする場合も、どう焦点を合わせようかとかどういうテクニックを使おうかというようなことを考えるのは、イラストレーターの資質なんだろうなと思う。だから、なにをやっているかという言い方で通したいと思っっているんですけどね。中村さんなんかもうそういう感じでしょ？

中村 はい、イラストレーターです。

宇野 ただ今だと、たとえば現代美術が格好いい投資みたいな感じがあつて、中村さんの絵なんかも現代美術として扱おうという作戦ができれば現代美術になりうる要素はありますよね。たとえば僕の好きな画家の松井冬子さんの絵はむしろ伝統的な日本画だと言えると思いますが、人気が出てくるとそれが現代美術というカテゴリーに入りますよね。画材とかは関係ないというか、むしろ日本画が面白がられているようなところもある。中村さんの場合も、ポップアートに近いですよ。誰かが知っているある記号性というか、どこか認知されているものを巧妙に計算づくで描くというポピュラリティがあつて。僕の場合もすごく似ているところがあるので、それで今回の対談相手に選ばれたのかなと思っっているんですけども。

—— 基本的には、イラストレーターという存在が面白いというか、さっき宇野さんがおっしゃったように、アーティストではないし、あるいは漫画家みたいな存在とも違う。



宇野亞喜良「鏡の国のアリス」(ギャラリーまある)ポストカード、2014年

ただし、イラストレーションというのは一枚の絵に芸術やら社会やらさまざまな要素を圧縮して封じ込めるみたいな作業をしていて、アーティストの表現としての作品というかたちではなく、広告のようにもっと広く時代の空気を切り取る作業なのかなという気がするんですね。そこで中村さんは一〇年ちかく、宇野さんは四〇年以上のお仕事をされてきて、お互いに同じ道を通りながらも違う風景を見てきたというか、あるいは同じ風景を見ながらも違うことをやっているというか、そのあたりでイラストレーションというものをどのように考え、どのようにやってきて、またどのようにやっていこうとしているかといったお話をうかがえればと思っっているんです。

宇野 僕はさっき、やっていることがすべてイラストレーションという発想に繋げて解釈できると言っただけで、いちいちそれについて考えているわけではないんですよね。たとえば舞台をやる時とか、あまりないけれどもファッションの要素として絵を描く時とか、イラストレーションということはあまり考えていなくて、面白い商品になるかと

後藤正文

(ASIAN KUNG-FU GENERATION)

僕たちの14年



二〇一六年二月、雑誌『イラストノート』No.40「中村佑介の無限」の刊行を記念して、お互いの新人時代からコラボレーションを続けてきたASIAN KUNG-FU GENERATION・後藤正文さんとのトークイベントが行われた。二〇〇四年にリリースされ、アジカンを名実ともにスターダムにのし上げたセカンドアルバムを、全曲新たなアプローチで再レコーディングした新生『ソルファ』を発表したばかりの後藤さんと、今回のアルバムジャケットも手がけた中村佑介が、出会いからこれからの未来の話まで、語り尽くす。

中村 『崩壊アンプリファア』が UNDER FLOWER RECORDS から出たのが何年だった？

後藤 あれが二〇〇二年だから、中村くんとはその年に知り合ってる。もう一四年だね。

中村 セカンドの『ソルファ』が二〇〇四年だから、インディーズからメジャーデビューを経てわずか二年でそこまで来たんだね。速い！ 僕もちょうど同じくらいの時期にプロとしてデビューしているんだよね。そこからDVD以外の、シングルとアルバムだけでも三三枚か。漫画でいうと三三巻、描いてきたなあ（笑）。

カバイラストを依頼したきっかけ

後藤 まだバンドが全然売れてなかった時に、アジカンで関西ヘアターに出かけて。

中村 それは何県？

後藤 神戸のスタークラブとアートハウスでライブをしたの。アートハウスの対バンが、B'zのコピーバ

中村佑介対談集「わたしのかたち」 2017.6.24刊行



後藤さんが最初に受けとった絵葉書「バス」

んだらう？

後藤 あいつら高校生のくせに友達全然呼んでなくて、「呼べよお前ら！」っていう感じでしたけどね（笑）。その時に、ライブによく来てくれていた本田（淳）くんっていう友達に、中村くんの絵葉書をもらって。その頃のお客さんなんて二〇人くらいだし、ほぼ顔見知りで、「あの音楽いいよね」なんて話すくらいの関係性で。その絵葉書も、本田くん「ゴッチさん好きだと思いますよ」って渡されたんだけど、見た瞬間に「これめっちゃいいじゃん！」と思ったの。当時、中村くんは「檸檬通り」っていうホームページもやってたから、そこを覗いたりして作品を見てただけで、他のものすごく気に入って。それで、ファーストアルバムの時にどうにかジャケットのイラストをお願いできないかなと思って、ダメ元で訊いてもらったんだよね。そしたら、意外とOKが出て。

ンドをしてる高校生だった。そのくらい売れてなかったんだけど。

中村 当時のライブに行った感じを見ても、知名度と集客力を考えたら、そういうバンドをブックキングされてもおかしくなかったよね（笑）。関西の人は、アジカンを知らなかったですからね。

後藤 でも、チケットは二〇枚くらい売れてたのよ。

中村 B'zのコピーバンドは何枚くらい売れてた

中村 その本田くんというのは、僕の大学の後輩だったの。当時、イラストを描く時に、本田くんにはポーズを取ってもらったりしてて、その中でアジカンの話も出てきてた。僕は全然知らなかったんだけど。

後藤 あの当時、知ってる人の方が少ないからね（笑）。

中村 知らないし、怪しいよ！「ジェネレーション」はいいとして、「アジアン」で「カンフー」って、イロモノか、パンクバンドかなと思ってた（笑）。

後藤 そうね、パンクイベントに名前だけでブックキングされたりとかはあったね。

中村 『崩壊アンプリファード』は最初はインディーズから出ただけで、そのジャケットを描く前に、テストとして、アジカンのライブポスターを作らせてもらったんだよね。まだ、メンバーに会ってない時に。それで、事務所から写真を送ってもらって描こうと思ったんだけど、どういう人かなと思ったら……。

後藤 鉄板ネタを出すのね。

中村 （写真を見せて）これ、やっぱい奴ら出てきたなと思ったよね！（笑） こんな人たちなの！と。ライブビデオもVHSで送ってもらったんだけど、もう音が録りっぱなしだからガッサガサで、本当にパンクバンドなんだ！って、一瞬やっぱ断ろうと思ってたんだよ。あと、絶対この人（ドラムの伊地知潔）“ヤバイヤツ”やってる！と思って。



後藤さんが受け取った絵葉書で印象的だったという「彼岸花」

江口寿史

漫画と
イラストレーションのあわいで



江口寿史さんがTwitterで、雑誌『イラストレーション』2011号の感想をつぶやいたことをきっかけとして、Twitter上で議論が巻き起こった。その際に、Twitterを通して江口さんに質問を投げかけた中村佑介が、江口さんと改めて顔を合わせ、イラストレーションの現在について語り合う。

Twitterがきっかけで起こった議論

中村 Twitter上で議論が起きた時、思うことはたくさんあったんですけど、実はあまり参加しないでこうと考えていました。というのは、これはきちんと雑誌でとりあげた方がいいなと思ったんです。ああいうインターネット上の議論でいい結果になったことを見たことがなく、結局すれ違いがすれ違いを呼ぶよりは、実際お会いして、もっと本当に理解しあうというか、いい感じで終わるものがないなと思って。

江口 ああいうのって言い出しっぱはきつかけにすぎなくて、僕が思っていたことをつぶやいても、そこからまたいろんな方向に議論がいっちゃうでしょ、Twitterって。そのうちにこの先は僕にとってはもうそんなに問題じゃないなってとこにいたりする。それで僕も途中からソッと抜けたんですけど。

中村 実は今号では対談企画はもう一個あるんですね。

江口 あ、そうなんです。それは中村さんも参加するんですか？

中村 いえ、そちらは参加しないんです。

—— 今回のお二人の対談とはちょっとまた別の視点から対談をして頂く予定です。

江口 昔そういう企画やってましたよね、イラストレーション誌ってね。俺が買った頃。

——議論する場を作ることと避けていたわけではないんですけど、絵を見せるとか作家を紹介するという誌面作りでしばらくきていたので、意見を戦わせるといった場面はなかったですね。

中村 でも今回のことでわかったのは、「じゃあ誰が言ってくれんだ？」ってなった時に、別に誰も言わないってことですよ。ミュージシャンなんかのことはどこでも書いてくれるかもしれないけど、イラストレーターのことはイラストレーション誌が言わないと。

細分化するイラストレーション

江口 今の若手では中村さん以外ないぐらいの感じじゃない？ 僕の思うイラストレーターの活動の仕方をお手本として世に認知されてる人っていうのは。

中村 いえいえ、僕たちの世代でもたくさんいらっしゃいますよ（笑）。

江口 絵だけ見てわかるくらいの知名度を得てるっていう意味でね。今はあんまりそういう方いらっしゃらないから。昔はそういう人が二、三〇人いたよね。僕がいちばん熱心にイラストレーション誌を買ってた頃はね。

中村 でも「イラスト界」と括ると、詳しい状況というのは僕も大阪にいるということもあって、全然把握出来ておりません。

江口 横の繋がりはないの？

中村 僕はまったくなくてですね。もう本当にここ最近マナージャー以外に会ったことがないというくらい（笑）。全部大阪でメールで受けて返事を出してみたいな感じなんです。たまに電話するくらい。作家さんとも会わないし、特にイラストレーターはそれこそアマチュアの大阪で活動している人に誘われ

て展覧会にたまに行ったりはしますけど。

江口 それは僕も『週刊少年ジャンプ』で連載していながら、横の繋がりはなかったからね。『COMIC CUE』をやってからですよ。繋がりが出来たのは。

中村 一方で、ゲーム、アニメなどのオタクカルチャーの方のイラストレーターというのは僕が知らないだけで、そのジャンルの中では名前が通ってる方がたくさんいる。だからそっちは元気あるんですよね。

江口 ラノベの表紙を描いているイラストレーターの方たちのこととかですよ？

中村 そうそう。

江口 あそこはなんか活発ですよ。でも一般の人たちは彼らの名前まで知らないもんね。

中村 一般の方たちは知らないんですけど。やっぱりそのファンの子たちの中ではけっこう大きい夢になってると思います。

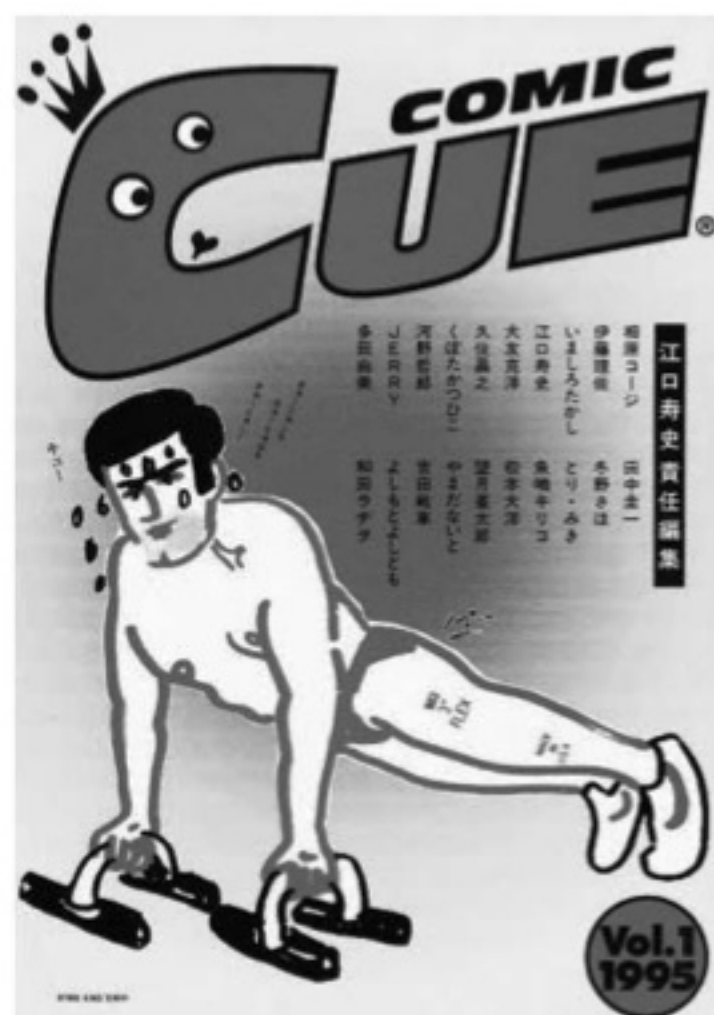
江口 だからそれぞれのジャンルでの盛り上がりはあるんですよ。

中村 そうですね。すごくお洒落なファッション

イラストレーション方面でもそういう盛り上がりがあったりとか。

江口 あ、そういうのもあるんだ。

中村 なんかいろいろ細かく分かれてまして。それこそ『イラストレーション』以外でも『イラス



創刊号から Vol.3 まで、江口さんが責任編集を務めた漫画雑誌『COMIC CUE（コミック・キュー）』イースト・プレス、vol.1 は 1995 年

ヒグチユウコ

絵で食べていくこと



キツチュで可愛い世界観で注目される画家・ヒグチユウコさん。中村佑介も雑誌のインタビュで度々注目を公言。今回はそんなヒグチ作品の魅力の秘密を紐解きながら、イラストレーターと画家の違いや、二人の共通する仕事観という深い部分まで、初対面にして多岐にわたる内容となりました。

インターネット始めました

中村 いきなりなんですけど、ヒグチさんはここ数年で、ものすごく知名度が上がったようなイメージがありました……。活動はずっとされていたと思うんですが、「ググッときたな！」という。

ヒグチ 私は、イラストのお仕事をさせて頂くようになったのが、わりと遅かったんです。それまではずっと個展をやりつつ作品を売って……という活動しかしていなくて。だから、商品として絵が出るようになって、急に知られるようになったというのはあるのかも。

中村 イラスト仕事が増えたというのは、それまでは断っていたんですか？ それとも個展などの活動を通して認知度が上がり、依頼も増えたんでしょうか。

ヒグチ 断っていたわけではないです。それに、絵自体は昔からあまり変わっていないし、人気がどうのってことでもなかったと思う。単純に、ネットに絵を発表するようにしたら、仕事が増えるようになった（笑）。

中村 あ、そうだったんですか！

ヒグチ そうなんです。Tumblrを始めて。そうしたら、企業の方がそこに上がっている絵を見て、声をかけてくださったり。それこそ、ユニクロさんとかも。びっくりしました。大企業でも、こんな無名

の絵描きのTumblrを見てくれたり、ましてや気に入って仕事を頼んでくれるなんてことがあるんだ、って。あとネットのすごいのは、例えば「うさぎ 絵」とかで検索すると、なにかの拍子で私の絵がヒットしたりする。それで、偶然目にとまったり。そんなことが起こるわけですね。そういうことが繰り返して起こって、仕事が増えていくようになったんです。

中村 ご自身としては、元々興味はあったんですか？ 画家だけではなくて、イラスト仕事もしたいなという。

ヒグチ いや、昔はあまり考えていなかったです。もっと現代美術寄りの方向性で作品を制作していましたが。でも、途中でだんだん「なにをやりたいか」というのに悩んだり、ちょっとわからなくなってきた時期があって……。その時ふと、挿画とかもやってみたいなと思ったんです。あと、身につけるものに絵を描いたり、デザインしたり、というのもありなのかなって。そう思っていたら、ちょうど仕事が出来たんです。幸運でしたね。それで、元々たくさん描く方ではあったんで、わりと仕事にはスッとして入っていました。

可愛いとグロテスクを両立させるバランス感覚

中村 でも、ヒグチさんがやっているようなファッション系の仕事は、本当に難しいと思うんですよ。良い絵だからって必ずしも可愛い服になる、というわけではない。いくら大好きな絵でも、それを身につけたいかというのはまた別の話ですもんね。例えばゴッホの絵が好きでも、ゴッホのTシャツ着ないし（笑）。あと、ヒグチさんがすごいのは、そういうお仕事をしつつ、いち作家としてのネームバリューもあって両立しているという部分。あまりそういう人、僕は知りません。服のデザインとして気に入

っても、それを誰が描いているのかまでは、気にならない方が普通だと思います。でも、ヒグチさんは違うんですよ。「誰の絵なんだろう？」とか「画集買ってみよう」とか。そこまで持っていく力がある。僕、実際そうでしたからね。いそうでいなかった人というか……。そのバランス感覚たるやすごいですよ。

ヒグチ おお、そんなふうに言って頂けるとは……。 （笑）

中村 いや、本当に。絵柄的には、こういう「ジャンル」ってあるとは思っています。『不思議の国のアリス』の世界観から続いているような、ちょっとゴシックな。好きな人は多いし、描きたい人も多いと思う。でもあくまで、ちょっと偏った趣味のものというか……。お母さんとかに見せても、あんまり喜んでくれないような感じでしょう（笑）。一般にまで普及するものではなかった。でも、ヒグチ



ファッションブランド「Emily Temple cute」ワンダーランドプリントワンピース、ヒグチユウコによる原画（『ヒグチユウコ作品集』所収、p.106）

さんの絵を見て、「おお……！」となったんです。そういうジャンルなのに、ちゃんと一般にまで届く絵。なにが違うんだろう、と考えてみて……。おかしな例えですけど、子どもでも食べられる珍味ってあるじゃないですか。イカの塩辛はキツイけど、明太子はいけるみたいな（笑）。そういう、地続きなんだけど、絶妙なポイントで「いける」方になってる。そのポイントは、色づかい、構図やモチーフの選び方、描写の仕方だったり。すごくそう

林 静一

少女絵に込める青春の匂い



イラストレーターになって一〇年、「小梅ちゃん」と目が合ってから二〇年以上の時を経て、とうとう憧れの林静一さんに会えることになった中村佑介。女の子のイラストレーションを描くにあたって、中村が最初にお手本とし、いちばん大きな影響を受けたのが林さんだった。「イラストノート」誌上でついに実現した、緊張の初対談。

憧れの時代は「刹那」

中村 僕が林先生の絵を意識的に見るようになったのは大学卒業間近の頃でした。当時は『ときめきメモリアル』のような美少女ゲームが流行っていて、僕もゲーム会社に就職を考えていたんです。それで、いろいろと女の子の描き方を模索していた時に、大学の教授が教えてくれたのが、林先生の画集『ジャパニーズ・ウーマン』だったんですよ。こういう感覚で女の子を描く人が日本にいたんだとびっくりしました。

林 それは嬉しいね。握手しよう（笑）。

中村 それから、僕は七〇年代のフォーク・ソングも大好きなんです。はっぴいえんど、はちみつぱい、あがた森魚などを聴いているうちに、当時の文化をつくった雑誌『ガロ』の存在を知り、そこで林先生が描いた漫画を発見して、また衝撃を受けたんです。僕が知っている『ジャパニーズ・ウーマン』とアバンギャルドな漫画『赤色エレジー』の作者が同一人物には思えなくて。



林静一『ジャパニーズ・ウーマン 林静一画集（新装版）』サンリオ、1989年

中村佑介対談集「わたしのかたち」 2017.6.24刊行

林 もう一度、握手しようよ（笑）。大学生の時に私の絵と出会ったという話だけれど、それは八〇年代のこと？

中村 僕は一九七八年生まれなので、二〇〇〇年頃の話ですね。林先生の描く女の子には、僕の好きな浮世絵やオーブリー・ビアズリーの世界と共通するものがあるようにも感じたんです。線だけで色っぽさが表れているような……。

林 若いのに驚いたね。私も浮世絵は好きで、いろいろ探ってみた経験がありますよ。それぞれのモチーフの組み合わせを深く勉強していくと面白いよね。同時代性の表現というのは、若い頃から自分の中で一つの課題ではあったけれど、そもそも私が自発的に描き始めたのは漫画だけなんです。

中村 それは知りませんでした！ 最初からイラストレーターになろうと思っていたわけではなかったんですか。

林 そう。東映動画にはアニメーターとして入社したんだけど、会社の仲間たちも皆『ガロ』を読んでいて、私も大好きな雑誌でね。それで先輩とアニメーションの制作会社を立ち上げた頃に、自分だけの世界をアートとして表現できそうだったので、漫画に挑戦してみたんです。実際にイラストレーターという肩書きが加わったのは、七〇年代の終わりくらいだったかな。確か横尾忠則さんや宇野亜喜良さんと一緒に『アサヒグラフ』の特集で取り上げられて、初めて自分が世間からイラストレーターだと

思われていることを知って、とにかく驚いたの（笑）。

中村 アニメーションの制作や漫画を描きながら、自分が将来やりたいことの具体的な目標があったんですか。

林 考えたこともなかったね。一九六九年にレコード大賞を受賞した『港町ブルース』で、森進一が「明日はいらない」なんて歌っていたけれど、まさに我々の時代は日本中がそんな雰囲気。一言で言えば「刹那」ですよ。その瞬間を限界まで楽しむというか、なんでもありの時代だったから。お金もあるだけ使ってしまう。雑誌のグラビアでも、私の絵と写真家が撮影した写真でコラボレーションしたりね。中村 僕たちの感覚でグラビアといえば、アイドルが水着になるページのことですからね（笑）。それにしても、当時と現在とでは「イラストレーター」という言葉の意味が大きく変わってしまったように思います。その頃はなんでもありの自由な発想と表現が当たり前だったというか……。今は書籍の装画や

挿絵、ポスターやCDのジャケットのように、決められた枠組みの中でイラストレーションを描くことを目指している人が多いような気がするんです。

林 そう考えると、やっぱり変わってしまったのだろうね。僕は書籍の装画や挿絵は少し苦手な部類に入るんだけど、中村さんは得意な方なの？

中村 書籍の装画や挿絵は大好きなんですよ。



『月刊漫画ガロ』（青林堂）1971年8月号、林静一による表紙絵。『ガロ』は日本初の青年漫画雑誌として1964年に創刊され、漫画界の異才を数多く輩出した。



オーブリー・ビアズリー《お前に口づけしたよ、ヨカナン》1894年

さだ
まさし

愛される歌であり続けるために



二〇一三年、デビュー四〇周年を記念したベストアルバム『天晴〜オールタイム・ベスト〜』のジャケットを手掛けたことから実現したこの対談。元々、さだまさしさんの大ファンだった中村佑介、憧れのさださんとの対話は、当然、熱のこもったものとなりました。

— このジャケットイラストは、まずどうやって出来ていったんでしょうか。最初にお二人でコンセプトなどを打ち合わせされたんですか？

さだ いや、全然（笑）。一度会ってお話はしたんだけど、そういう打ち合わせではなかったよね。

中村 そうでしたね。さださんから、「とにかく自由に描いてほしい」と言われました。タイトルを大きく入れたいとかもないし、このジャケットをキャンパスとして好きに使ってほしいと。僕はそれを聞いて、「さださんがそう言うって下さるなら、思う存分やろう」と思いつつも、やっぱりみんなが気持ちよくなれるものになりたいと考えましたね。さださんも、レコード会社の方々も、そしてもちろんファンの方々も。いろいろ考えましたよ。

さだ アイデアがまとまるまで、どのくらいかかりました？

中村 まるまる一カ月くらいはずっと考えていましたね。メモ帳にアイデアを書き留めたりしながら……。それで、豪華なベストアルバムだし、ましてや四〇周年記念だし、とにかく「めでたい」感じにしようと思ったんです。

さだ なるほど、それで熨斗のしになったんだ！ このアイデアには驚いたんですよ。「熨斗かい！」って（笑）。

中村 ありがとうございます！ 実は最初は、中面にあるギターとバイオリンが結婚している絵が先に思いついていて、これでいこうかなとも一瞬思ったんですよ。

さだ 僕は中面のその絵もすごい好きですよ。『関白宣言』だよ。これは良いよ。中を開いたらこの絵が出てくるなんて……すごい贅沢だし、ファンの人も本当に喜ぶだろうと思う。

中村 僕も、我ながらこの絵はよく出来てると思います！（笑）でも、これだと若い人への吸引力には欠けるので、わざわざ僕を起用してくださった意味は薄れてしまうと思いました。ただ、葛藤もありましたね。やっぱり僕が描く以上、人間を描くべきだとは思ったんです。でも、さださんのジャケットイラストに、唐突に若い女の子を描くというのも、なんだか違和感があるなと思って……。それで、今の人なのか、それともご年配の方の若い頃なのか、どちらとも取れるような女の子を描くことにしました。若い人が見ても「かわいい」って思ってもらえて、さださんのファンの方々が見たら「なんだか懐かしいな」って思えるような。

さだ そこまで考えていたんだ。すごいなあ……。たしかにこの絵を見ると、細かいところまでこだわりが本当にすごい。描いてあるものが一つ一つ、考え抜かれているなと感じますよ。

中村 ファンの方が見た時に、「このイラストレーターは、ちゃんとさださんの曲を聴いているな。さださんのことが好きだな」って嬉しくなる絵にしたかったんです。

さだ まさにそういう絵だよ。あと、アーティストの直感力、想像力というか……ある種のテレパシーみたいなものすら感じられて、最初に見た時ビックリしたんです。「さだまさしの歌」と聞いた時に浮かぶイメージって、客観的に言うと、「叙情的な歌詞、日本的、メロディアス」……そういった言葉で表現されることが多い。世間的にはそういうイメージ。でも、実際コンサートによく来てくれている

ようなファンにとっては、そういう感じでもないと思うんです。かなりそのギャップがあるんだよね。温度差もあるし。そういう観点から見ると、この絵は、実はかなりコアなさだまさしの世界観が表現されているんですよ。さだまさしの内面、実情を知っていないと、この絵は描けないんじゃない!? って思うくらい。

中村 うわ、それはすごく嬉しい感想です。ありがとうございます。



さだまさし『天晴～オールタイム・ベスト～』（ユーキャン）中村佑介によるジャケット原画、2013年

さだ まさにそういう絵だよ。あと、アーティストの直感力、想像力というか……ある種のテレパシーみたいなものすら感じられて、最初に見た時ビックリしたんです。「さだまさしの歌」と聞いた時に浮かぶイメージって、客観的に言うと、「叙情的な歌詞、日本的、メロディアス」……そういった言葉で表現されることが多い。世間的にはそういうイメージ。でも、実際コンサートによく来てくれているようなファンにとっては、そういう感じでもないと思うんです。かなりそのギャップがあるんだよね。温度差もあるし。そういう観点から見ると、この絵は、実はかなりコアなさだまさしの世界観が表現されているんですよ。さだまさしの内面、実情を知っていないと、この絵は描けないんじゃない!? って思うくらい。

中村 嬉しい！ 僕、フルパワーを注ぎ込みましたからね！ しばらくこれを超える作品は描けないんじゃないか、と思うくらい。でも、仕事である以上、これ